

國學院大學學術情報リポジトリ

神道研究の国際的ネットワーク形成：
神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成：
21世紀COEプログラム

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學21世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」 公開日: 2024-06-25 キーワード (Ja): 170.4, 神道 シントウ キーワード (En): 作成者: 井上, 順孝, 魯, 成煥, 色, 音, テーウエン, マーク, ブリーン, ジョン, ベンテリー, ジョン, ナカイ, ケイト, ヘイヴンズ, ノルマン, 遠藤, 潤, 平藤, 喜久子, 武井, 順介, シッケタンツ, エリック, 加藤, 里美, 加瀬, 直弥, 松本, 久史, 真田, 治子, 稲場, 圭信, 國學院大學21世紀COEプログラム メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000506

セッション6

英訳神道事典のネット上での展開と 神道研究の国際化

井上順孝

国学院大学教授



【司会（ナカイ）】 本日の最後の発題者は、私からご紹介するまでもございませんが、国学院大学の井上順孝先生です。このプロジェクトの中心的な立案者であり、原動力であり、私たちがここにいるのも、みんな井上先生のおかげだといっても過言ではありません。それでは井上先生、発題のほうをよろしくお願いいたします。

発題

井上順孝

【井上】 では発表させていただきます。国学院大学のCOEプログラムが始まって以来、いろいろな企画を立案し、実行してきたわけですが、特にこの第3グループでは、英文の神道事典の改訂とそれをオンラインで公開するという作業、それと同時に、本日のようなシンポジウムを通して研究者の国際的なネットワークをつくる作業、この2つを大きな目標としてやってまいりました。

最初にも申しましたように、このCOEプログラムというのは拠点の形成のためのものですので、今後どうなるかということが、これからの我々にとって大きな課題となります。私自身、実際にいろいろなことをやって非常に大変ではありましたが、多くのことが勉強になりました。いろいろな方と知り合いになれて、おそらくこんな機会がなかったら知り合えないだろうという方——ベンテリーさんもその1人だと思いますが——もいらっしやいます。従来から知っていた方——ジョン・グリーンさんなどは20年以上前から知り合いであったわけですが——、そういう人とともに何人かの新しい人とも知りあえて、大変嬉しかったわけです。そうした個人的なことはさておき、これから国学院大学で何をやるのかということで、私なりに考えています。これらをどういうことを注意しながら展開していかなければならないか、これまでを振り返りながら、今後への提言という形で発表させていただきます。明日の研究フォーラムでは、具体的にはいろいろなことを詰めなければいけませんので、できれば、そのたたき台になるようなことをお話ししたいなと思っています。

パワーポイントを使いながらお話しします。実は神道事典の翻訳というのは、この事典を1994年に刊行した当初から考えていたことでありました。でも、もとのボリュームを鑑みますと、それは半分夢物語だろうなど、とも感じていました。でも、とにかくスタートしようということで、本学にはヘイヴンズさんがおられましたので、お願いしました。英訳がこつこつと始められたわけです。刊行当初からなぜ翻訳したいと思っていたかという、1つには、神道研究を国際的に展開したいという思いがあったわけです。私自身は新宗教の研究を中心にやっておりましたから、新宗教研究の国際的なつながりというのは結構ありました。しかし、国学院大学日本文化研究所に勤めるようになり、神道関係のことをやるようになってから、先ほどからも指摘されていますが、神道研究というのはあま

り開かれていない側面が強いことを実感しました。どうしても内輪で研究して、内輪でま
とまってしまうという面が強いので、何とかして、これを開きたいというのがありました。
神道事典をつくったのも、そもそもそういう意図が含まれていました。また、神道事典が
翻訳されれば、その内容は編集当時の神道研究の水準を大きく反映していることになりま
す。世界に発信するには、やはり英語にしなければいけないし、その上でいろいろ評価を
得て、それをまた糧にして次の展開があるのではないかと。そういう発想でありました。

結果的には、ヘイヴンズさんの多大な努力と、若干のアシスタントといえますか、補助
者を得て、2005年度までに3冊が書籍で刊行できました。これは皆さんのご承知のとおり
であります。しかし、ちょうど2巻目が出るちょっと前ぐらいにCOEの採択がございま
した。私はこのプログラムを有効活用したいと考えるようになりました。

一方で、1990年代の後半から、日本の宗教研究の場でも、インターネットの利用という
ものをどうしたらいいかという話題が盛んになってまいりました。幸いにしてというか、
たまたま私はそういうものに関心があったものですから、比較的早い時期からそれに着目
しまして、90年代には個人的な関わりですが、いくつかの所属する学会とか研究所で、そ
ういうことを模索するようなシンポジウムを開くことができました。でも実際には、宗教
研究の分野でインターネットに関する議論が本格化し、その議論を反映させたような具体
的試みが増えてきたのは2000年以降になってからです。ちょうどそうした時期とCOE
が重なった感じになりました。神道事典の全部を翻訳し、書籍で刊行するとなると、ヘイ
ヴンズさんが生きている間に終わるかどうかわからないということもありまして、ぜひこ
れをCOEでやりたいということで企画したわけです。

しかし、やり始めましたらいろいろな問題が出てきて、その意味では事典を翻訳してオ
ンラインで公開するという作業には、さまざまな問題点が凝縮されていたような気がしま
す。苦労はしましたが、とてもいい勉強になりました。我々スタッフは全員がその苦労を
共有してきました。その意味で、我々が苦労した点は何か、今後やるときにはどこに注意
したほうがいいか、ということはこういう場で明らかにしておいた方がいいと思います。
おそらく今後、こうした試みがいろいろな研究機関でなされるはずなので、それを意識し
たいと思います。

翻訳作業は、かつては翻訳ができれば——といっても、そこはむろん大変なのですが——、
それを活字として出せば一応終了というプロセスだったわけです。しかし、これをオンラ
イン公開するとなると、そこにサーバーとか、インターネットサイトとか、そういうもの
が登場します。これは単にプラス1のプロセスではない、非常に複雑な仕組みがそこで出
てくるということを、身をもって感じたわけであります。

もちろん翻訳するということは、既にいろいろな問題、たとえば異文化問題などを抱え
ておるわけです。翻訳を経験された方はここに何人もいらっしゃいますので当然ご存じの
ことですが、例えば神道ということに関しましても、実はオリジナルな文書の翻訳もある
し、それを解釈したものの翻訳もあります。研究論文となると、既にそこでいろいろな解
釈の多様性が出てきます。その多様性が翻訳にすべてかかわってくるわけですので、もと

もと翻訳というのは非常に複雑な問題をはらんでいるということは言うまでもないわけです。

しかしオンライン公開となると、こういった従来からの問題にさらに上乗せされて、他にもいろいろな問題が付加的に出てきます。実はこの翻訳の問題だって根本的に解決されているわけではなくて、ナカイ先生などは、そういう翻訳をするときのいろいろな問題を毎日経験されていると思います。ここに図にまとめましたが、これは解決されている問題ではなくて、つねに課題となることのリストアップみたいなものです。翻訳上の問題とそれをオンラインで公開するということで、ここからは、我々の事典に関してどんな問題が出たかということで、一般化を行う手前の具体的な事例報告として聞いていただきたいのです。

事典にはさまざまな事典項目がありますが、それを翻訳するときは原文執筆者とは違った人が訳すわけです。たとえば人物名でも、日本語の原文を複数の人が分担して訳すわけです。そういうばらばらな、つまり体系だってなくて、さまざまな項目がさまざまな人によって訳されるということになります。翻訳者は、最低限、日本語と英語が理解できるわけですが、いろいろな国の人がおります。ここに「同時多発的な異文化問題」と表現できるようなことが起こります。我々は翻訳文の編集にあたって、質問を翻訳者から受け取って、我々スタッフが回答するというシステムを作りました。遠藤潤さんとか、平藤喜久子さんとかがその対応の係になってもらいました。幸いにしてと申しますか、質問の数はそれほどは多くなかったのです。しかしこの作業を設けたことによって新しい問題が起ってきた。それは単に言葉だけの問題ではなくて、さまざまな、そもそも原文での記述が正しいかということもあります。以前だったら翻訳者1人がやっていたことが、複数の翻訳者に情報を開いたことによって、多くの人が同じ問題を共有しなければいけなくなったということがあったわけです。事典でしたら、まだよかったのですが、これが文学作品とかになったら、どうなるのだろうかとは私は思ったことがあります。辞書の文章自体は、比較的短かったので、なんとか対応できる範囲で済んだのですが。

今、オンラインの事典は途中です。目標としては2007年3月に本文が全部、アップロードされる予定です。今の時点(2006年9月)で15~16万のアクセスがございしますが、今後アップロードが進んでいくともっと頻繁に使われるようになってくるでしょう。完成した後は、アップロードした内容についてお互いにチェックしようと考えています。つまり、本でしたら、刊行されたところで一応の終わりですが、オンライン版では絶えずバージョンアップすることが可能なわけです。無論、本でも改訂の機会がありますが、それに比べると比較にならないほどの柔軟性を有しています。そのときに一体どういうふうな柔軟さをもって臨んだらいいのだろうかというのが、私自身、目下、悩んでいるところで

す。

解決策の1つとして、議論に参加できる人間には、執筆者、翻訳者、スタッフに限る手があります。誰がコメントしたのかということが明示できれば、何とか統制がきくだろうと思われれます。しかし、これをもしネット空間の特徴を活かそうと、完全にフリーアクセ

スにしたりすると大変なことになるでしょう。極端な場合は、見ていた人みんなから、翻訳とか、解釈について異議が出かねない。まあ、これは極端な話ですが、万一、そういうシステムにしたとするならば、これをどう統制していけるかは非常に大きな問題となります。結局、ネット空間ですから、そこに意見を寄せる人が必ずしもアイデンティファイできるわけではない。だれがどういう立場で言ってくるかがわからない。ここまでオープンにしますと、かなり大変になるのですが、もちろんメリットもあります。これまで全く知らなかったことがわかるかもしれないし、新しい視点が入るかもしれない。そういうものはあるのですが、そのどちらを大事にするか、広がったことによって得られるものと広がったことによって混乱する部分とのバランスの問題になるわけですね。そのバランスいい点をどこにみつけるか、これについて私はちょっと悩んでおりまして、来年3月までに結論を出さなければいけないと思っております。

今の時点では、各項目へのアクセスは合計16万件近いわけです。「Movies List」をつくってから、何だかアクセスが多くなったような気がします。この動画は国学院大学の祭祀教室で撮影したもので、大澤広嗣さんが中心になって編集してもらいました。しかし、見る側は、説明がこれだとよくわからないかもしれません。せつかく動画のリンクをつくったなら、項目だけではなくて、リンクの説明もある程度欲しくなるでしょう。フリーアクセスにしたら、多分、いろいろな意見が寄せられるかと思います。項目についているアイコンは、日本語でどう発音するかを示すためのものです。加藤里美さんの声を入れてありまして、日本語での発声も実際に聞くことができるというようなシステムです。

このような技術的な向上に関わることなら、いくらでも向上させていこうと考えています。でも、そこは実はあまり問題ではない。技術的なことは、いろいろな人が便利なものをどんどん作ってくれますので、使えるものは使っていこうという心持ちでいけば、いつでも向上させることはできます。問題なのは、むしろそこで起こってくる混乱とか、先ほど申したいろいろな問題をどうするかということです。少なくとも執筆者、訳者、研究者のオンラインフォーラムのようなものはぜひつくりたいと思っています。そこに例えば史的言語学の立場からの解釈、例えば先ほどの祝詞の年代はおかしいのではないかというようなことをおっしゃることは可能ですし、それにどう対応できるかはわかりませんが、ベントリーさんにはご協力をいただいているわけですから、ぜひご意見はいただきたいと思っております。

一方、ネットワークの形成という意味から見てみると、今までの連続国際シンポジウムに参加していただいた方の多くは、翻訳スタッフでもありますので、恒常的に連絡を取れるようなネットワークを作ってきたということが言えると思います。しかし問題は、先ほどからも提言されているように、今後、このネットワークがどうしていくのかということだと思います。資金が途絶えて終わりということになり、せつかく作ったものが元の木阿弥になってはしょうがない。そこで、先ほど私が申しあげました問題についていろいろとアドバイスをいただきたいと思います。資金的なことは個人的にはどうしようもないです。ただ、助成金が得られましたら、その中の一部を、この後継として充てたいと思ってお

ります。人のつながりも基本的なものはできたと言えます。ですから、あとはそれをどう生かしていくかということが重要になります。せっかく形成したシステムですので、外的あるいは内的な理由で崩壊したりしないように、注意しなければと思っております。

これについては先ほど申したようなことです。インターネット上で繰り広げられる議論をコントロールしていく手段というのが一番難しいということです。一般的には、先ほどもどなたかおっしゃっていましたように、管理者がしっかりしていればある程度はできます。でも、1人の努力で、1人の管理者がずっとそれをコントロールするというのはとても大変なことです。そして、その人がいなくなったら、もう続けられないというような体制ではいけないわけです。そのようなシステムだと、研究機関が継続的に運営していく上ではやはり少々問題があります。そのためにも、何かいい手だてを考えなければいけない。私はいろいろな学会の運営とかを見ておりますが、それがうまく考案されているところはほとんどないのではないかと感じています。ホームページを立ち上げたり、何か新しいことをしようとするときは人は頑張るものです。個人的にもそうでした。ホームページを初めてつくるときには一生懸命つくのですが、だんだん面倒くさくなりがちです。私のホームページも「もう半年も更新されていません」とか文句を言われたこともあります。やはり最初にたちあげるときは、多少意気込んで始めるのですが、持続的にそれをアップデートするというのは、かなりエネルギーを使います。でも、そう言っていては研究機関の役割は果たせないで、この点を何とかして考えていかなければならないと思います。

例えば事典に即して申し上げます。事典がオンラインになりますと、書籍に比べてはるかに頻繁に訂正できます。そのことはもちろんいいというか、メリットが多いのですが、しかし、極端に言えば毎日毎日変えることができる。しかし、そうすると、利用者にとって、そういうふうに見るたびに変わる事典というのは一体どれぐらい信用できるものかということが逆におこってしまう。昨日、正しいと思った読みが、次の日は違う読みに変わっているというようなことが実際に起こりうる。間違いを指摘されて。今の段階では作成途中なわけで、完成するのが3月までですから、言い訳はできるわけです。「まだ準備中で、B版みたいなものを皆さんに供与しているのです。だから、完全なものは3月からごらんください」というふうに一応は言えます。しかし、でき上がった後、つまり全項目がアップロードされた後、そういうことを繰り返していると、後で言いますが、ウィキペディア (<http://ja.wikipedia.org/wiki/>) とどう違うのかという問題が出てくるわけです。

そこで、ここに大きな改訂と細かな訂正との区別といった、訂正の基準を明確にし提示してみてもどうかと考えています。いつ、どういう理由で改訂されたかということを、ユーザーが知る手だてを何らかの方法で示すことが出来れば、紙で刊行された事典と同じような信頼性を得られるのではないかと。内容的には、紙で出版したものよりレベルアップしているわけですから。しかし、今言いましたように変わるということは、場合によっては不信感を招くという面がありますので、そこを考慮する必要があります。

それから先ほど言いましたように、オンラインでは、ユーザーからの反応が得やすいことが予想できます。欧米ではどうかかわからないのですが、日本ですと、書店で購入した本

の中に葉書が入っていて、「ご意見をどうぞ」という場合ものがあります。でも、学術書などでは、めったに葉書は来ないですね。でもたまに、その葉書によって誤植がわかったり、違う見解があるということがわかることもあります。これに対し、ネットで反応を知るための仕掛けを作ると、非常に多くの意見が寄せられる可能性があります。それによって、いろいろなものを吸い上げることができるけれども、きちんとした対応システムを作らなければ混乱する。さらにはスタッフの仕事量がものすごく増える可能性もあります。どんな質問が来るかわからない、だれがそれに対応するのか。今でも翻訳やチェックしているもの同士、お互い詳しくそうな人に聞いてみて解決しているのです。作成途中ではまだそれが我慢できても、一旦でき上がってからは、そういう努力がどれだけできるか。そして、それが量的に蓄積していったら、それはかなりきついことになります。現在は神道事典だけですが、もし次の企画が立案され、それに手をつけたときにどれだけの労力が必要となってくるか。全部積み重なっていたら大変なことになってしまうのは目に見えていると思います。そういうことで、メリットとデメリットのバランスをじっくりと考えた上で選択していかなければならない、と考えております。

先ほどちょっとと言いましたウィキペディアですが、これは私は非常に関心を持って見ております。今の段階では、研究者はあまり使わないとは思いますが、でも実際のところは、使っている人もいるように見受けられます。学生にとってはものすごく重宝されているというのはご存じのとおりです。彼らが提出したレポートにも、ウィキペディアの丸写しというのは必ずといってほど見受けられます。そしてウィキペディアの項目によっては、内容の質もかなりよくなっているものがあります。英語版と日本語版と、ウィキペディアの内容がどうなのかなど。これもおもしろい比較研究の対象になり得ることだと私は思っているのですね。

と申しますのは、先ほどグリーンさんもおっしゃいましたが、学術的なことに関して意見交換していいものをつくり上げていくという姿勢なり制度は、やはりまだ正直言って日本は遅れていると思うのですね。宗教学とか、他の研究分野でもそうかもしれませんが、学会発表のときに質疑応答があります。その質問のとき、「自分がいまから質問することを悪く思わないでくれ」という申しわけの言葉がまず入ることがよくあります。そして「大変いい発表で、非常に参考になりました」と言った後、「ちょっとだけ質問させてください」というようなパターンが今でも日常的なわけですが。私みたいに「2つぐらい質問があります」といきなり言うと、個人的に攻撃されたのかと誤解する人もでかねない。なかなかそこから脱皮できないようですが、これはいわゆる文化の問題です。学問全体を包む文化の問題です。それはネットにも直ちに反映されます。ですから、学術的な議論を展開するときに、ネットの掲示板がうまく活用されていないというのは、実際に会って話すときの議論の方法がなかなか確立されていないことの反映ではないか。ツールに慣れていないから起こる問題ではないと私は思っています。

ですから、ウィキペディアのようなオンライン事典が、日本語版と、例えば英語版とで、どちらが信頼できるものになっていくのかというのは、個人的に非常に関心を持っており

ます。

たとえば、ウィキペディアのように不特定多数の多くの人が共同でつくり上げていって、それを多くの人が利用できるというシステムがもっと精緻化したときを想定してみてください。そのようなシステムと専門家がつくって学術的なものとして公表したものと比較して、後者のほうがはっきりと優位であるということをどうやって言えるのかという問題がでてきます。このことは今から考えておいていいと私は思っております。両者の幅というのは、今後だんだん狭くなってくると私は思っています。

時間も迫っていますので、もう1つ、今後のことで考えていることを申し上げます。先ほどからも出ておりますが、神道研究に関する基本的な文献を双方向に翻訳するということです。これは前回のシンポジウムでも少し申しました。それから、神道事典の編集会議でもこのアイデアを出しました。「オンラインで訳すなら、本として出す方を優先して訳してください」と言われた記憶もありますが、COEプログラムでは、本年度からすでに着手しています。

これについてどういう考えを持っているかということを簡単に申し上げます。クリアしなければならない問題がいくつもあるので大変なのですが、双方向でということは、日本語の神道関係の論文——これは国内の研究者から推薦があった学術論文を選びまして——の翻訳者を見つけて、それを翻訳してもらう。もとの原文のほうはPDFにして、それを載せ、それに対応した翻訳（英語等）をテキスト版として載せる。当面は英語への翻訳が中心になると思いますが、ほかの言語では、例えば色音さんが中国語に訳すとか、知り合いの学生に訳させるとかということであれば訳をお願いしたいと思っています。また逆に、国外の神道関係の学術論文、これは日本人の研究者にもぜひ共有してほしいというものがありましたら、それを推薦いただきたいと思います。まずは「こういうものがある」ということをお知らせいただいて、我々がその論文は適切ではないかと判断した場合には実際に翻訳を開始する。つまり選ぶのはそれぞれの国で担当してもらい、たとえば「韓国には、こういうおもしろい論文があるのでだれか訳してもらえないだろうか」ということを推薦してもらって、翻訳する人が見つかったら実施する。こういうふうに紙媒体ではなくて、ネット上で公開することを目的として行いますので、最初からオンライン版として作っていきたいと考えています。

これが実現すると、少しずつ基本的な研究論文が自国語で見られるようになります。現在お話しているのは神道研究についてですので、申し訳ないけれども、日本語をベースにさせていただいて、日本語から複数の言語に、また複数の言語から日本語へ翻訳というのを基本にすればいいのかなと思っています。インターナショナル、グローバルに考えれば英語を基礎にしたほうがいいと思いますが、神道研究ですので、日本語でという発想です。

先ほどの発題で、神道に関する一般的な入門の本が欲しいという提言がありました。それもちろん考えていきたいのですが、これまで述べてきたようなシステムが整いますと、これを応用することで対応できると考えています。一般の紹介も必ずしも本でもなくても、このごろの若い人はどんどんインターネットを使いますので、ちょっと関心がある人はネ

ット上で見たときに、入門書がオンラインで——入門書というか、それこそ先ほどの神道事典のもっと一般バージョンといいましょうか——そんなに知識がない人でも、動画があり、アニメがあり、そして簡単な解説があるということがあれば、入門書のかわりの機能を果たすのではないかと思います。結局、経済コストその他いろいろなことを考えて、オンラインという今のネット環境を最大限利用することになるでしょう。それが私の現在の発想の根本にあります。

ハード的には、本学には学術メディアセンターというものが2年後、正確には1年半後にできまして、その中でいろいろなことをやるために現在企画しています。今申し上げたことをうまくここの中に位置づけ、そこに国外研究者も招いて、常時、そのような発信とか、学術交流に関わっていただくということも考えております。

以上が発表でございます。あと、ご質問がございましたら、お受けしたいと思います。

質疑応答

【司会（ナカイ）】 私自身が要点を繰り返すより、直接、質問に入ったほうがいいと思います。あと 15 分ぐらいありますので、質問なり、コメントなり、活発な議論をお願いします。

【江島】 日本文化研究所共同研究員の江島尚俊です。各国の論文を日本語に訳し、さらに日本語のものを双方向的に訳していく、その企画は非常に意義深いものだとも思います。それをオンライン化していく場合に、さきほどの発題の中にもちょっと出ましたが、私としては、オンライン化と同時並行して紙媒体でも発信していくべきではないかなと思います。

といいますのも、先生も何回もおっしゃっていたように、EOSでも誤字脱字があつて、誤植があつたり、もしかしたらもっと大きな間違いがあつたときに、ころころ変わるといふような場合の信憑性をご心配なさっていたらっしゃいました。それは同じように翻訳された論文、つまり日本語への論文、日本語からの論文においても全く同じことが言えるかと思ひます。ですので、翻訳の量がある程度蓄積されて、編集側で信頼性を置けると判断したものとしたものは、何らかの形で出版されたほうが、信頼性の担保という意味で、オンラインで見ている側も信用を持って見てくれているのではないかなと私は考えますが、この点に関してはいかがでしょうか。

【井上】 もし訂正の問題でしたら、私は技術的にクリアできていると思ひています。オリジナルなものも間違いがあります。PDFでやりますと、その間違いがそのままになりますから、それは校正ツールというか、注釈とか、いろいろ使えば、その間違いを訂正したものをアップロードできます。

それから翻訳したものにつきましては、バージョンということを明記すればいいかなと思ひています。「バージョン 1.00」から始まったとして、これはどこが変わったとまで書くとは厄介ですが、とりあえずバージョンが分かっている、何月何日に改訂された「バージョン x.xx」ですと書くことによって、多少の訂正があつたということを明らかにする。そこまでやれば、実は本の改訂情報のときの作業とあまり変わらないことになります。書籍の場合も、初版で間違いというのは必ずあるわけですね。初版本を買った人は損ということになるでしょうが、初版しか出なかった本だと、それしかないわけですね。でも、2刷、3刷となったときには訂正するわけですね。でも、どこを直したかは比べないとわからない。初版を買って比べてみないとそれはわからない。書籍でもそれぐらいのやや不親切な訂正の仕方は許されているわけですから、オンラインでも、バージョンさえ明記して、いつ変わったかということを明記していくならば、新しいバージョンというやり方で信頼性はあつる。

しかし、にもかかわらず、やはり紙媒体の形で出版しないと認められないという問題はまた別の問題だと思ひています。これはつまり、オンライン出版された論文や翻訳が例え

ば業績になるのかというような問題です。でも、紙媒体で出さないという主な理由は、1つは経済的なものですが、同時に、将来的な予測もあります。学術論文の読まれ方ですが、今はオンラインでは読まないという研究者の方が多いかもしれません。しかし、5年後、10年後になると、新しい世代は逆に紙媒体よりもオンライン版を多く読む人が増えるかもしれないということです。そういうことでよろしいですか。

【司会（ナカイ）】 では、まずテーウェン先生、それから、そちらの方と。

【テーウェン】 オンラインの神道事典が英語で公開されたことは、もう既に学生たちの論文にもあらわれているように、画期的な出来事だと思います。さっきの映像とかを見てびっくりしていたのですが、いろいろなことができるのですよね。そこでちょっと思ったのは、こういう神道事典の英語訳は、本当の意味での神道研究の国際化にはつながらないことです。日本人の研究者が10年以上前に書いたものが今英語になって、それを今度、外国に伝える企画なのですから。ですが、オンライン上のフォーラムだったら神道研究の国際化をやっていけるような気がしますね。ですから、例えば研究論文の翻訳というお話もありましたが、翻訳は大変なことなので、学生に任せられることでもないかもしれない。この前、中国の色先生が見せてくださったのですが、中国で発表された神道に関する論文はもう既にネット上にありますので、リンクを1つ作ってしまえば、それが神道事典のところから見られるようにすることができます。それで中国語さえできれば、それを参考にすることができます。これは非常に貴重なことだと思います。英語で書かれた論文の中でも、例えばJ J R S (*Japanese Journal of Religious Studies*) に載っている神道関係の論文は、そのまま見られるようになっていますので、リンクさえつくれば、神道関係でどんな研究論文が発表されているかがわかるわけです。それには、いろいろな形が考えられるでしょうが、そういうことも可能なので、どう思いますか。

【井上】 もちろんリンクということはおもしろいというか、重要な手段だと思いますが、私はリンク集とか、リンクでの情報提供は、やはり補助的なものだと思います。というのは、リンク先はいつなくなるかわからないし、それから、リンク先での情報内容の信頼性の保証です。だれがどういうふうにしてつくったものかということを、どの程度調べていくか。1つか2つだったらいいのですが、あちらこちらにあるときに、リンク先のことを保証するというのは結構大変なことなのです。

私は実際に（財）国際宗教研究所・宗教情報リサーチセンターのセンター長をしておりまして、そこでリンク集とかをつくっています。そこでは1つ、ポリシーにしていることがあります。それはリンク集といっても必ず実在する団体、あるいはそういう実際場でわれわれ自身が確かめたものについてしかリンクをしないということです。やはり、リンクだけでやると、バーチャルなものと実在するものとの混在が必ず起こってきます。その保証をどこまでするかというのは、これからは余計に大変になると思います。

一方、ネット上に非常にいいものがあってそれが信頼の置けるものとしたら「参考にこれをどうぞ」という情報提供は非常に大事なことで、そういうリンク集をつくることは重要だと思います。でもやはりオリジナルのもので、一定のポリシーのもとにつくられたも

のが長期的には信用を得ると思っています。信用を得るというのは、それが正しい一番いい訳だとかというよりも、どんなポリシーで、どんなものが集められて、どんな人がそれにかかわっているのかということが判断できるということの重要性です。だからネット上のコンテンツの作成について、ある大学の研究機関でやっているというのと、いろいろな人が寄せ集めてやっているのを比べたとします。後者の中には、素人の人もいるかもしれない。そういうものが一つでも混じっていると、全体の信頼性を落とします。そういうものを1つリンクしただけで——たとえば「とんでも本」と言われているようなもの——そういうとんでもない話を翻訳して載せたものが1つリンクされてただけで、同じようにリンク集にある他の学術論文の価値を下げてしまう。このことは非常に重要なことと私は考えているのです。だから、リンク集は補助的に使うという基本方針がいいのではないかと。

そして、なぜ翻訳にこだわっているかということ、日本で有名になった外国の本というのは、ほとんど翻訳された本です。これはどこの国でもそうかもしれません。外国では非常に有名でも、日本語に翻訳されていなかったら、日本ではあまり話題にならないのです。やはり訳されて初めて多くの人が読むという実情があるので、外国のいい論文をまず研究者が共有しやすくするということは、次の段階に影響を及ぼせると思っています。いろいろな人が、ある人のことを評価し始めると次第に広がるのですね。一部の原書を読む人だけ同士の議論だったら、読んでいない人はあまりついてこれません。だからなかなか幅広く発展していかないのですね。残念ながら、今後も同じだと私は予測しています。特に神道研究ではそうだと思います。

【テウエン】 でも、JJRSとか、中国の学会から取り入れた論文だったら、リンクもなくならないと思いますし、一応、ちゃんとした学術雑誌で出された論文しか、そのリストには載っていないので、そういう心配はあまりないような気がします。翻訳に関しては、おっしゃったとおり1年に2、3本しかできないと思います。けれども、原文のものなら、簡単に載せておくことができますね。それなら原文とはいえない論文が簡単に載せることができるようになるから、一定の価値はあるような気がします。

【井上】 ですから、リンク集をつくること自体には別に反対ではなくて、それはそれでいいのです。でもそれはあくまでもリンク集であって、オリジナルに、少しずつでも一定のポリシーのもとで構築するものがあることが、結果的には、そのリンク集に対する信頼にもつながると考えています。オリジナルなものではなくて、いろいろなところにリンクしているだけというのはいくらでもあります。それは個人でもできることなのですね。実際やっている人もいます。だから、それとは差別化するというか、せつかく共同でやれるわけですから、リンクにとどまらないものを少しでもつくっていかねばならないと思います。

【司会（ナカイ）】 では、武井さん。

【武井】 COE研究員の武井と申します。2つほど、井上先生にご質問があります。

まず1点ですが、統制した形で議論を開くか、あるいは自由なネット空間に開くかとい

うお話があったと思うのですが——これは質問というか、僕の意見というか——プログラムにかかわっていてちょっと思ったことでもあるのですが、我々がどこに対して目を向けるかということによって、統制のやり方が違ってくるのではないかなと思うのですね。例えば英語圏における一般の人に、EOSを利用してもらう場合、自由な空間にしたほうが僕はいいのではないかなと思います。ただ、そうすると、先ほど先生がおっしゃったように、どうしてもこちら側の人材、リソースの不足という問題があると思います。つまり仕事量が増えるということがあると思うのですね。ただ、そうした場合には、ある程度編集側と一般ユーザーとの間でコミュニケーションをとるということを考えると、価値観を共有していないと話ができないような気がするのですね。そうすると、EOSというものを今後、最終的に一般に開示していくということがあるとしても、まず神道研究、日本文化研究をやろうとしている研究者に提供していくということで、ある程度統制されたような形で開いていくというものが——これはあくまでも僕の意見というか、にかかわっていて思ったことなののですが——いいのではないかなということをつつ思いました。

それともう1点なのですが、ウィキペディアと専門家がつくった事典との違いは、どこで信憑性、信頼性が担保できるかというお話をしていただいたと思います。それに関して、僕は、発信する主体がどこにあるのかということが重要なのではないかなと思います。ウィキペディアは、一応、IPアドレスを取り、誰が編集をしたのかわかるようにはなっているのですが、IPアドレスという「(ネット上の)住所」がわかっている、その「住所」の先に、どういう人が住んでいるかというのは、実際、ウィキペディアの場合はわからない。つまり、ある意味、匿名の人が修正を加えているというのがあると思うのですね。しかし、EOSの場合、専門家がつくったオンライン上の事典の場合、バックボーンとして例えば研究所なり、大学というものがある。そうすると、それだけでもある程度信憑性、信憑性というものを担保できるのではないかなと僕は思うのですが、いかがでしょうか。

【井上】 最初のほうはご意見だったので、私もいろいろと考えているところもございます。ただ、次の問題とも関わっているのですが、ネットでのやり取りの難しさというのは、今、IPアドレスのことを言われましたが、本当はだれがやっているのかということを知るのがまず難しいということと、一体どういう人がそこに参加するかという対象性を簡単に想定できないということがあるのですね。

さきほどの2つ目の問題でも、研究所が出す、大学が出すということで一定の信憑性があると思ってやっているわけですが、他方ではユーザー側からすると、どっちが使いやすいか、どっちがためになったかと判断もあると思います。もう少しウィキペディアが一般の人に認知されて、もう少しルールが洗練されてきたときに、では研究者ではない人にとって、ウィキペディアと国学院大学日本文化研究所とどっちが信用があるかというのは、これは私は非常に微妙な問題になるだろうと思っています。今はまだ大学とか、研究機関というのが実際存在するからということですが、ネット空間で作り上げられた作品の威力というものが判断基準に介入してくる時代はもう来ていると私は思っているのです。ですから、それはやっている主体だけでは済まないのではないかなと思っています。

これは5年先、10年先の将来予測のような話になってしまいますが、ネット情報の威力というのは、おそらく我々が考えている以上の効果を持つようになると思います。だから、おそらく学生の中には、国語辞典よりウィキペディアのほうが頼りになって、いい辞典だから、そこから引用してなぜ悪いのだという感覚の人が、すでに数多くいると思います。それはよくないのだというときに、なぜよくないのだということを説明できる教員がどれだけいるかという話になります。そういうことが積み重なっていったときに、どんな事態になるか。ちょっと私は予測できないのですが、あまり簡単な話ではないと考えています。

【司会（ナカイ）】　ちょっと暗い懸念で終わることはどうかと思いますが、時間を過ぎましたので、明日はもっと明るい話になるように、今日はここで終わらせていただきたいと思います。（拍手）